
世界一くだらないカーチェイス

仙人掌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界一くだらないカーチェイス

【Nコード】

N8599G

【作者名】

仙人掌

【あらすじ】

突如現れた暴走車と、白バイの彼とのカーチェイス（片方二輪ですが）です。衝撃のラストをあなたは目撃する……

温かくなってきたが、まだまだ夜は寒い。

白い息を吐く若い男が一人

白ではなく、タバコの灰色の煙を吹く男がまた1人。

「何でこんな時間に飲酒検問しなきゃいけないんだか・・・」

「それは先輩が白バイで大暴れした罰ですよ」

「結果的に違反者が捕まったからいいじゃねえか」

上は現場をわかつちゃいねえ、とため息の変わりにまたタバコの煙を吐く。

彼は有能だが良く問題を起こすことで知られている。

どうやら今回は無茶をした罰に深夜に仕事を追加されたようだ。

早く家に帰ってワイフのコーヒーでも飲みたいぜ、とかっこつけないから道路を通る車を見張る。

「てか仕事中にタバコ吸ってて良いんスカ？」

「ゲームボーイやってるお前よりかマシだ」

「PSPですよ」

これだからおっさんは、とでも言いたげな後輩を先輩の白バイ隊員が殴る。

「明日中にこのソフト返さないとマズいんですよ」と言い訳を聞いてもう一発殴る。

「とにかく勤務時間中にゲームはやめろ」

「へーい」

全く嫌な奴の面倒を見ることになったな、と彼は頭を痛める。

最初の内はしつこく叱っていたものの暖簾に腕押し、ぬかに釘。叱られることに慣れているようだ。

しかも何やら上に親か何かがいるようで、クビにもできない。

真面目にやることにそこまでこだわらないが、ゲームに興じているのは流石に見過ごせない。

タバコをちゃんと灰皿でつぶしていると、サボり魔が気だるそうに言った。

「あれ飲酒運転じゃないですかね」

そう言われ渋めの彼が顔を上げると、ふらふらと酔っ払いのオヤジを具現化したような車が走っていた。

それを見て仕事だ仕事、と新しく支給された白バイを走らせ、その後を少し遅れて後輩が付いてくる。

「その車止まってー」

新人隊員の気の抜けた声で車が止まる。

こいつ白バイの新人辛さ知らないな、と彼は呆れた目で後輩を見つめる。

それでも無駄に体力はあるようで、音を上げないところは認めているようだ。

「ういゝひつく。飲んでないって言ってるらよお」

言葉と正反対に行くオヤジが車を降りてくる。
嘘もここまでのいけば嘘と呼べないだろう。

「じゃーここに息をはあくってやって下さーい」

「何らよおう。やったらなんか貰えんのかあ？」

「じゃあ後で飴玉くらいは」

「うへへへ」

何がうへへだ。

心の中で毒づいて、深いため息をつく。

次の瞬間、彼の愛機が宙を舞う。

「へ？」

「先輩、厄日ですね」

「厄日、厄日」

数秒の忘我の後、自分の白バイが法定速度ぶちぎりの車にはね飛ばされたことを認識する。

頭に血が猛スピードでのぼり、後輩の白バイをひったくる。

「これ借りるぞ！」

「30分1000円くらいでどうスかね？」

「ざけんな！ 飴玉1つくらいで勘弁しろ」

「へーい」

「いってらさ〜い」

何故か酔っ払いも手を振る。

明王と化した鬼はさっそうと後輩の白バイに飛び乗り、自らも法定速度をぶっちぎる。

あの機体は最近支給されたばっかなんだぞ！
その恨みと怒りで彼の頭が一杯になる。

「待てやその暴走車ああ！」

白バイが追ってきた恐怖か、それとも彼の気迫におされたのか車は更にスピードを上げる。

しかし流石はベテラン。

車間をスピードを一切落とさずすり抜ける。

たまに車をウィリーで飛び越える大技もやってのける。

「おおおおお」

それでも中々車との差は縮まらない。

ちなみに暴走車は一般人がマトモに操作できる速度を超えている。
車の中の男は今世紀最大と言っても過言でないほど集中力が高まっ

ていた。

「ブレーキすらかけねえか・・・」

恐らく逃走中の犯人だろうと彼は推測する。

ひき逃げか、強盗か、それとも殺人犯か。

ククク、と彼は警察らしからぬ笑みを浮かべる。

実はこの男、バイク専門の元走り屋だったりする。

その時白バイに捕まって、その隊員の格好よさに憧れて入隊を決心する。

なんて経緯があるが面倒なので省略。

「ハハハハ、久々に燃えてきたぜえ！」

今度はガードレールの上を走ってみたりする。

白バイの重量でそんな大技可能なのか？などのツツコミは控えてもらいたい。

彼は燃えているのである。

熱い心は常識を凌駕したりしなかったり。

「・・・どう止めりゃいいんだ？」

暴走車が目と鼻の先まで来たところで、重大な事実に気づく。

呼びかけないに応じない時点で取れる手段は限られてくる。

逆を言えば手段はあるにはあるだろう。

応援を呼ぶのがまず取るべき行動であろう、多分。

冷静さを欠いた彼の脳内にはそんな手段は存在しないが。

「く！」

一瞬の迷いのせいだ。

暴走車は速度が落ちた白バイを突き放す。

その事実が走り屋時代【首都高の帝王】と呼ばれた彼を余計にヒー
トアップさせる。

この俺が、この俺が突き放されるだろ?!

入隊してからこの走り屋王者としてのプライドが、似たような事件
を何回も引き起こしていたりする。

「らああああああ!」

トップスピードに一気に達する。

再び追いつくが、止めることはできない。

呼びかけても無駄、救援を呼ぶという選択肢は彼の頭の中にはない。
もう迷って速度が落ちることは許されない。

彼が取った行動は……

「しやらくせえ! 突っ込む!!」

勢いのまま車体を浮かせ、暴走車に追突する。

後部座席が二輪のタイヤに蹂躪される。

さしもの暴走車の運転手も驚いたのか、急ブレーキをかける。

甲高い音も止み、車は完全に停止する。

「ゲホゲホ、俺も無茶したもんだ」

冷静になって相当馬鹿なことをしたことに気づく。

ま、結果オーライだ。

自分を納得させ、運転席に乗っていた男を引きずりだす。

「おら、出て来い！」

「・・・・・・・・」

追突された方の男も奇跡的に無傷だった。

それでもたんこぶ位はできているかもしれない。

しかし何も喋らず、ただただ青い顔をするだけだ。

「どうしてあんなスピードで走っていたんだ？」

「・・・・・・・・」

やはり逃走中の殺人犯か何かだったのだろう。

青い顔と無言がその証拠だ、そう彼は思った。

「ん？」

その時だった。

逃走していた男の肛門から何かが排出されたのは。

「トイレに急いでただけなんです・・・」

(後書き)

白バイ隊員については間違った部分もあるかもしれませんが、あったら教えてくださるとありがたいです。

また読んでいただき、誠にありがとうございます。

あと下ネタ苦手な人すいません・・・

たまたまニュースみてて、こんな理由で逃走してたら下らないな！
と思って書いたので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599g/>

世界一くだらないカーチェイス

2010年11月23日04時57分発行